

歌
舞
妓
草
子

歌舞妓草子

都の春の花ざかりく、かぶき踊にいでうよ、そもくこれは出雲の國大社おほやしろに仕へ申す社人にて候ふ、それがしが娘に國と申す巫みの候ふを、かぶき踊と申す事を習はし、天下太平の御世なれば、都にまかりのほり候て踊らせばやと存じ候ふ。

古里やいつもの國をあとに見て、末は霞みて春の目の、長門の國府こふを過ぎぬれば、かゝる御世にもあふの宿しゆく、道せばからぬ廣島や、問ひよる宮は嚴島いつくしま、舟のとまりにならたの濱、釣するわざはうし窓の、月にあかしの浦傳ひ、なほ行末は世の中の、なにはの事もよしあしの、若葉に風のふく島の、湊の波の治まれる、御世には今ぞあふ坂や、急ぐ心のほどもなく、都に早くつきにけり。

これははや都について候ふ程に、心靜に洛陽の花を眺めばやと思ひ候ふ、をりしも春の事なれば名にし負うたる花の都、こよやかしこの花見の遊び、花の袂を重ねつと、色々

あふの宿―逢ふ、大野
うし窓―憂し、牛窓
ふく島―吹く、福島

千本―地名

の裳裾もすそを染めて、木の下ごとに圓居まきこして、歌ふもいとど面白し。そもく都ほとりの花の名所めいしょ、地主權現ぢしゅこんげんの花の色、鶯のお山に咲く花は、靈鷲山りやうじゆせんの春かと疑はれ、大原や小鹽の山の花盛、今も御幸みゆきや仰ぐらん。さて又返り眺むれば、大内山の花盛、近衛どのの絲櫻、千本せんぼんの花にしくはなしと打眺め、天満あまるとつ神にぞまゐりけるく。

いかに申し候ふ、今日は三月二十五日、貴賤きせん群集ぐんしゆの社參の折柄なれば、かぶき踊を始めばやと思ひ候ふ、まづく念佛踊を始め申さう。光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨南無阿彌陀佛、なむあみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ、はかなしや鈎かぎに懸けては何かせん、心にかけて彌陀の名號、なむ阿彌陀佛、なむあみだ。

念佛の聲にひかれつゝ、罪障の里をいでうよ。のうくお國に物申さん、われをば見知り給はずや、そのいにしへのゆかしさに、これまで参りて候ふぞや。

思ひよらずや、貴賤の中にわきて誰とか知るべき、いかなる人にてましますぞや、御名を名乗りおはしませ。いかなる者と問ひ給ふ、われも昔の御身の友、馴れしかぶきを今とても、忘るゝ事のあらざれば、これも狂言綺語をもつて讚佛轉法輪のまことの道に入るなれば、かやうに現れいでしなり。さては此世になき人の、うつゝにまみえ給ふかや、

ふしぎ一節にか
けていふ

かぶかん一浮れ
戯るゝをかぶく
といふ
きの毒一木と氣
とにか

くるく一来る
来るにかく
おかく一女房

さしてそれともいは代の、松の言の葉かずくに、袖を聯ねてきた野なる、右近の事と
夕顔の、花の名残の玉鬘、かけても思ひ出でざるや。言葉の末にて心得たり、さては昔
のかぶき人、名古屋どのにてましますか。いや名古屋とは恥しや、なごやかならぬ世
の交り、人の心はむら竹の、ふしぎの喧嘩をしいだして、互に今は此世にも、なごやが
池の水の泡と、果てにし事の無念さよ、よし何事も打棄てて、ありし昔の一節を、歌ひ
ていざやかぶかん、いざやかぶかん。

あ只うき世は生木に鉈ちやとのう、思ひまはせばきの毒やのう。

あ只お國は柚の木に猫ぢやとのう、思ひまはせばきの樂。

淀の川瀬の水車、たれを待つやらくるくと。

茶屋のおかゝに末代そはど、伊勢へ七度熊野へ十三度、愛宕さまへは月まゐり。

茶屋のおかゝに七つの戀慕よのう、一つ二つは痴話にも召されよのう、残り五つ皆戀慕
ぢや。

風も吹かぬにはや戸をさいたのう、さよばさすとて、疾くにもおしやらいで、あ只つれ
なの君さまやのう、そなた思へば門に立つ、さむき嵐も身にしまぬ。

いかにお國に申し候ふ、これははや古臭き唄にて候ふ程に、めづらしきかぶきを、ちと見申さう、今の程は淨瑠璃もどきといふ唄を歌ひ申し候ふ、さらば歌ひ聞せ申さんと、つづみの拍子打揃へ、調子をこそうかどひける。

かけて驅けて、懸けて

わが戀は月に叢雲花に風とよ、細道の駒、かけて思ふぞ苦しき。

山を越え里を隔てて、人をも身をも偲ばれ申さん、なか／＼に歌に節とは思ひ候へど、それ吹く笛は宵の慰み、小唄は夜中の口ずさみとよ、あかつきがたに思ひ焦れて吹く尺八は、君にいつもそふてふ、別れて後は又あふしき、春雨のしだれ柳のうちしをれたるを、見るにつけても此春ばかり。

そふてふ添ふてふ、雙調あふしき逢ふ、黄鐘

世の中の人と契らば、薄く契りて末まで遂げよ、もみぢ葉を見よ、薄いが散るか、濃きぞまづ散る、散りての後は、訪はず訪はれず、互に心の隔たれぬれば、思ふに別れ思はぬに添ふ、なさは大事のものかの。

かぶきの踊も時すぎて／＼、見物の貴賤も歸りければ、名古屋は名残の惜しきまゝに、待てしばし／＼、歌へや舞へや、拍子に合せて打つづみの、とどろ／＼と鳴る神も、思ふ中はよもさけじと言ひしも、いたづらに別れになれば、お國は名残を惜みつゝ、又一

節ふしこそ踊りける。

お歸りあるか名古屋三さまは、送り申さうよ木幡こはたまで、木幡山路こはたやまちに行き暮れて、ふたり伏見の草枕、八千夜やちよそふとも名古屋三さまに、名残をしきは限なし。

よくく物を案ずるに、このお國と申すは、忝くも大社の假に現れ出で給ひ、かぶき踊を始めつゝ、衆生の惡を祓はんため、かよるかぶきの一節をあらはし給ふばかりなり、あら難有の次第かなく。